
風鈴とシャンデリアとのディスタンス

瀬戸 路成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風鈴とシャンデリアとのディスタンス

【Nコード】

N1118F

【作者名】

瀬戸 路成

【あらすじ】

推理もの。登場人物など書くのが面倒くさいので省きます。すいません。

再会

「ふふふ…。いいのよ、それで」
頭の中が何かに支配されていく。しかし畠山には“それ”が何かわからなかった。

岐阜県岐阜市。今日もここはうだるような暑さが漂っている。街を歩く人間は皆、日傘やタオルや団扇や扇子など暑さ対策必須の物を持っていた。畠山は今日、この岐阜市で行われる中学の同窓会に招待されていた。東京の大学に通っていたため畠山にとって、故郷の空気を吸うのは一年ぶりだった。畠山は少し懐かしさを感じながら同窓会が行われる木下邸へと向かった。

「畠山」

後ろから声がした。畠山は振り返ろうとしたが躊躇った。

「この声は…」

目を閉じる。が、それは刹那、開かれた。

「林」

後ろに立っていたのは林という昔から勉強一筋の男だった。分厚いフレームの眼鏡をかけていて、特徴ある天然パーマは今も健在だった。

「変わってないな。林」

「一年で変わるものか」

林も東京の大学に通っているため、畠山とは連絡を今でも取り合っている。

「木下さんの家ってどこかわかるか？」

「あれは家という部類なのか？」

「城……と聞いている」

畠山は木下の家に足を運ぶのは初めてだった。しかし、昔から彼女の家の噂は耳にしていた。やや林が畠山より先を歩いていた。

「ああ、あれは城だよ。本当に。お前見たこと無いのか？」

「無い」

「驚くぜ。ありゃあ」

「そうか」

こんな暑い日なのだからきつと中は涼しくて、たくさんの飲み物が用意されているはずだ。畠山はそんな期待を胸に秘めつつ、歩いた。

「もうすぐだ」

林が言う。

「何回目だ、それ」

二人とも運転免許を持っていなかったもので、このとき切実い欲しいと思った。しばらく二人は歩き続けることになる。

「あ、あそこだ」

林が指を指した。遠くのほうに空に突出した何かが見える。畠山は目を凝らしてみるがわからない。そもそもこんな場所へ来ることさえ初めてだった。こんな場所とは岐阜市から少しはなれた閑静な住宅街のことだ。

だんだん近づいていくにつれ、そのシルエットがはっきりと見えてきた。白いと言うよりクリーム色の大きな楕円の屋根があった。その敷地は一見見ただけでは、わからなかった。

「こんな家、いや城が木下さんのなのか？」

畠山は開いた口が塞がらなかった。

「圧巻だ……」

「だろ？」

林は畠山の方を見ずに言った。

正面にはまるでシンデレラ城を思い出させるような堂々とした門。

門に彫られている天使の姿。

門から建物までの距離は遠い。

畠山たちは黒い鉄製の柵を押して建物まで歩いていった。

呼び鈴のボタンがとても大きく、しかし玄関に相当する場所にはそれそがなくすぐにわかった。しかし押してみても開かない。

「あれ……鳴らないぞ？」

「ああ、確かここは……」

鈍い音を立てながらドアが開いた。

「どうぞ」

どこからか声がする。その声の持ち主は木下のものでは無い事だけはわかった。ドアの向こう側は暗くて何も見えない。

「え…」

「ここです。上を見てください」

畠山たちは上を見る。天使の彫刻がずらりとならんでいた。

「なるほど。ここで誰が来ているもか確かめるんですね？その右から三つ目の天使が持っている甕にカメラがある」

畠山はさすが金持ち。と思った。

「正解です。あなたたちの確認は門から入ってきた時から監視させてもらってます」

その声は年老いた男の声だった。

「では、入ります」

ドアの中に入ると電気がついた。

「さあ、早くアナタの力を見せて…。オネガイ」

「うわっ」

林は声を出した。ドアの向こう側は畠山の予想通り、式場或いはダンスホールに似た豪華な空間があった。

天井には大きなシャンデリア。

中央には真っ赤なカーペット。

カーペットに沿って食べ物、シャンパン、花などがのった幾つかの丸テーブル。

カーペットの先にはピアノ。

ホールに他への空間へつながるための三つの扉。

「誰もいないなあ」

「そうだな。今もう十一時なのにな」

同窓会は十一時半に催される予定だった。しかし誰もいない。さっきのあの男も見当たらなかった。畠山は無意識のうちにその豪華な空間を歩き回っていた。

「すげえよな。ホント。木下さんの家、どんな仕事してるんだろ？」

林も畠山につられ、歩き回った。

「わからない。岐阜にこんな豪邸があるなんて知らなかったし…。

でも先ずは人間だろ？ 誰一人いないなんておかしい」

「確かに」

しばらくして一番右の扉が開いた。

「おそくなつてすみません」

タキシードを着た還暦をむかえたぐらいの男が歩いてきた。背筋はきつと自分達より真っ直ぐだと畠山は思った。

「いえいえ。それよりみんなどこにいるんです？」

「柚子様達はこちらで雑談をしています」

男が手を自分が出てきたドアに向けた。

「では、残りの二つのドアは？」

「寝室とか家族が団欒する場所があるんじゃない？まあ構造が全然わかんないけどね」

林が笑った。

「残りの二つはまあそんな所です。柚子様がお待ちです。こちらへ」

「ああ、はい」

ドアを開くと長い廊下が現れた。男を先頭に二、三メートル離れて畠山たちは歩いた。

「なあ、やっぱりあれって執事か？」

林は廊下の壁に掲げられている美しい絵画に目を向けていた。

「そうだろ？初めて見たけど」

この会話は聞かれているのか、また自分の行動を監視されているのか、辺りを見回してもカメラらしいものは無い。絵画に仕込んであるのだろうと思ったが、探すのはそこまでしておいた。

談笑

「あ、畠山くんじゃーん。それに林くんも。ようこそ！」

クリーム色のスカートの部分が膨らんでいるワンピースを着た木下が出迎えた。

「ああ…」

「よっ、木下！」

林は右手を挙げた。男に案内されたこの部屋はごく普通のリビングだった。しかし三十人はゆうに入れそうだった。

「お嬢様、こちらの方たちは」

「わかってます、國男。何か飲み物を出してあげて」

木下の飲み物と言う単語を聞くまで畠山は自分が喉が渴いているということを忘れていた。

「はい。かしこまりました。何がよろしいでしょうか？」

國男は畠山たちと視線を交えなかった。

「そうだな、じゃあ僕はオレンジジュースで」

「俺も畠山と同じでいいぜ」

「かしこまりました」

國男は入ってきたドアをもう一度開けて、出て行った。

「君の家は何をしてるんだ？」

畠山は木下に聞く。木下の雰囲気が一変したように感じた。

「そうそう、俺も知りたかったんだよね、それ」

「さあ、知らないわ。そんな事。知ってどうするつもりかしら？」

口調は全然変わっていないなと畠山は思った。唯一変わったのは髪の毛の色と身長だ。彼女の今の身長は畠山より少し低い。

「知って…僕もやってみようかなと」

畠山は笑ってみた。

「つまらないわ」

木下は踵を返して、窓際に置かれている花の所へ行った。窓の内側

には風鈴が取り付けられていた。畠山はこのとき自分の質問が木下の機嫌を悪くしたと感じた。

「見て、この花。綺麗でしょう？」

「あ、うん。そうだね。木下さん、お花好きなんだ」

畠山は出来るだけ木下の機嫌を損なわせないよう話した。

「なあ、みんなはまだ来ていないのか？」

林がポツリと言う。畠山もそれを聞きたかったが、さっきあんな質問をぶつけたため聞くのが億劫になっていた。

「ええと高原さんと宮くんが後で来るわ。メールが入ってた。一応、来る予定の人はあと大野さん、だけよ」

木下は携帯電話を開いていた。おそらくスケジュール表でも見ているのだろう。ちゃんと手帳を使えば良いのにと畠山は思った。

「六人？」

「ええ。ほかの皆の連絡先はわからないわ」

「そうか。木下さんらしいね」

木下はキッと畠山の方を睨む。畠山は木下と目を合わせないようにした。

「お客さま、お飲み物をお持ちしてまいりました」

國男が戻ってきた。

「あ、ありがとうございます」

「どうも」

二人はお盆にのせられたコップを手にとった。苺を象ったコップだった。可愛いねと木下に言おうとしたが止めといた。

「皆遅いね」

林は既にオレンジジュースを飲み終えてコップをお盆の上に置いた。ポケットからハンカチを出して口を拭った。

「そうね。でもまだ時間じゃないし」

「まあね。それより今日、何をするんだい？」

そう聞かれた木下は待ってましたと言わんばかりな表情になって言った。

「ひ、み、つ」

軽いウインクをして林に言った。こと人はよくわからないと畠山は思った。

木下の携帯が鳴った。バイブリーダーとともに歌が流れた。女性の声だったが誰の何の曲か全然見当がなかった。

「宮くん達、来てる。國男、さっそく案内してきてあげて」

端っこにいた國男はさつと顔を上げた。

「はい。その方はもう来ていらっしゃるのですか？まだ何も反応してませんが」

「今歩いてるの。もうすぐ着くから、玄関で待ってて」

「かしこまりました」

國男は二つコップがのったお盆を持って部屋から出て行った。

「もう、皆来てるって？」

畠山は言った。少し胸が高鳴った。今まで意識しないようにしていたが無理だとわかった。

「高原さん、来るつてよ」

林は畠山の肩に手を置いた。今現在の話ではなく、内面的な部分に焦点が当てられているとすぐにわかった。

「…どうして知っている？」

畠山の心臓が今にも破裂しそうだった。誰にも話したことは無い。なのに何故林が知っているのだろうか。

「長年の付き合いだとわかるんだよね。そっいうの」

にやっと笑っていた。畠山の心臓の鼓動はさらに速くなった。木下も二人の話を聞いていたらしい。

「高原さん、まだ一度も彼氏できたことないんだよー」

「そ、そうか。別に興味はないけど」

畠山は黒い革製のソファに深く腰かけた。

「疲れた…。早く帰りたいね。もう。東京にいと岐阜がやけに田舎染みて見える」

「その、早く帰りたいって言うのは高原さんが来て緊張するから？
そして岐阜が田舎に見えるというけれど、東京よりは品があると思
うわ」

「そうだな。確かに東京は品が無い」

林が納得した。腕を組み、液晶テレビをマジマジと見ていた。

「テレビ、見たい？」

「ああ、少し」

木下はテレビをつけた。その液晶テレビはスクリーンのように大きく迫力があつた。ドアがノックされた。ノックの音は今日初めて聞いた。そしてドアが開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1118f/>

風鈴とシャンデリアとのディスタンス

2010年10月22日10時12分発行